

企業家行動における計画的偶発性とその帰結に関する探索的研究

…極薄ガラス製造企業事例をもとに…

これは企業家研究である。

事例対象として極薄ガラス製造メーカーを挙げている。

オランダのヤンセンは1590年に複式顕微鏡を開発する。その後、ドイツのツアイス社は1886年には1万台の顕微鏡を出荷するに至る。

そのような世界市場の中で、日本は明治維新を迎える。ドイツから消耗品であるカバーガラス（デッキグラス）も日本に輸入されることになる。そこで、木村又兵衛なる人物は従来の日本の薄板ガラス製造技術を用いて、ドイツ製でなくても通用する商品を製造し始めた。

しかし、素材組成の問題、切断刃の問題が見つかる。改善を試み一定の成果を得ることになる。

これは1890年代のことである。この商品は同年代の内国勸業博覧会に出展されている。

(これら事実は日本近世窯業史、日本ガラス工業史といった書籍にも明確に記載されている)

しかし、木村又兵衛は企業家として勝者の果実を得ることが出来なかった。

企業家として成功する要素は何であろうか、これらについてGrounded Theoryという質的分析手法を用いて解析を試みたものである。

モノづくり、更には周辺市場がワールドワイド化して行く現況において、有益なものになることを目指して、この研究に取り組んだ。

大阪府立大学大学院 経済学研究科 上野山ゼミ 藤田 卓

本研究の構成

第1章：序論

- 第1節 本研究の背景と目的
- 第2節 本研究の意義と構成

第2章：先行研究の検討

- 第1節 企業家研究の展開
- 第2節 計画された偶発性に向けての研究

第3章：リサーチクエスションと分析枠組み

- 第1節 リサーチクエスション
- 第2節 分析の枠組み
- 第3節 分析対象企業の概要

第4章：研究の方法

- 第1節 データ収集
- 第2節 分析方法：グラウンデッド・セオリー・アプローチの概要
- 第3節 分析の過程

第5章：結果

- 第1節 創業期における企業家
- 第2節 再構築期における企業家
- 第3節 発展期における企業家
- 第4節 新展開期を築いた企業家

第6章：考察

- 第1節 創業期について
- 第2節 再構築期について…好奇心と柔軟性、未知への準備
- 第3節 発展期について…好奇心、持続性、柔軟性、未知への準備
- 第4節 新展開期について…好奇心、冒険心、未知への準備

第7章：終章

参考文献

付録：分析データと概念

導入

事例の分析

第1章 序論

本研究の背景と目的

企業家についての概況と日本企業の姿

日本の長寿企業数

世界的に極めて高い水準

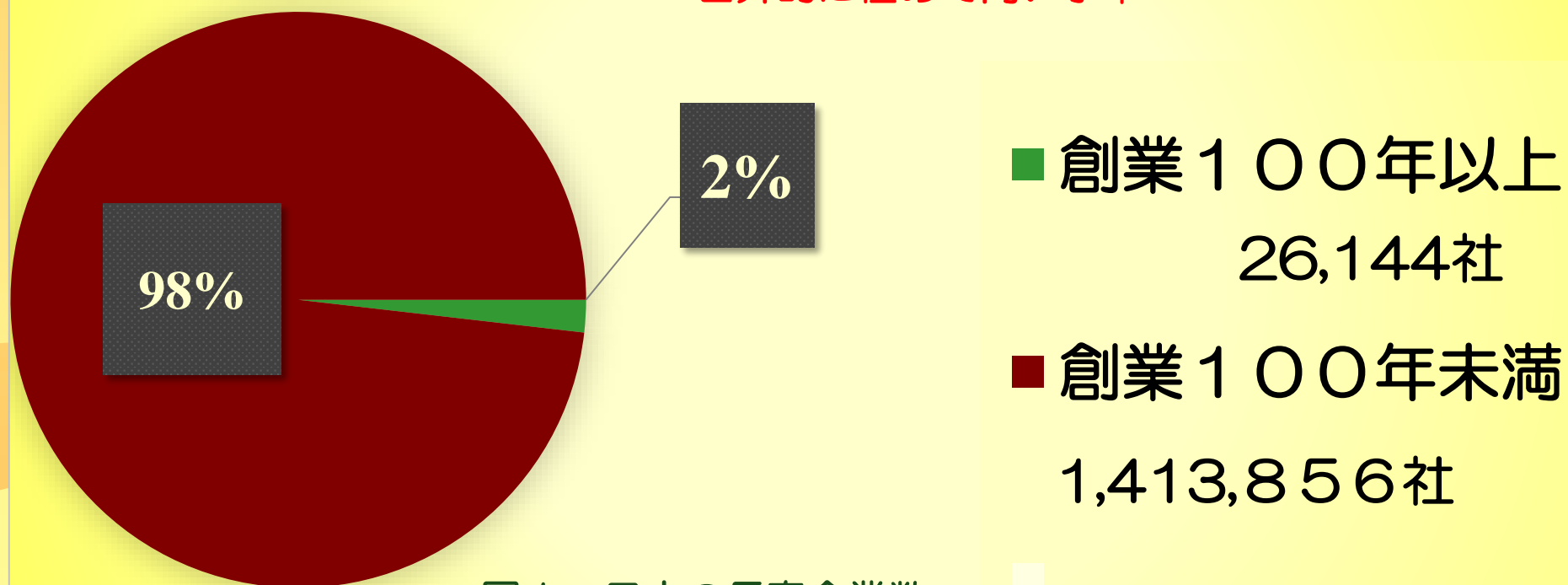


図1 日本の長寿企業数

帝国データバンク「COSMOS」(2013)参照

長寿企業の創業時期

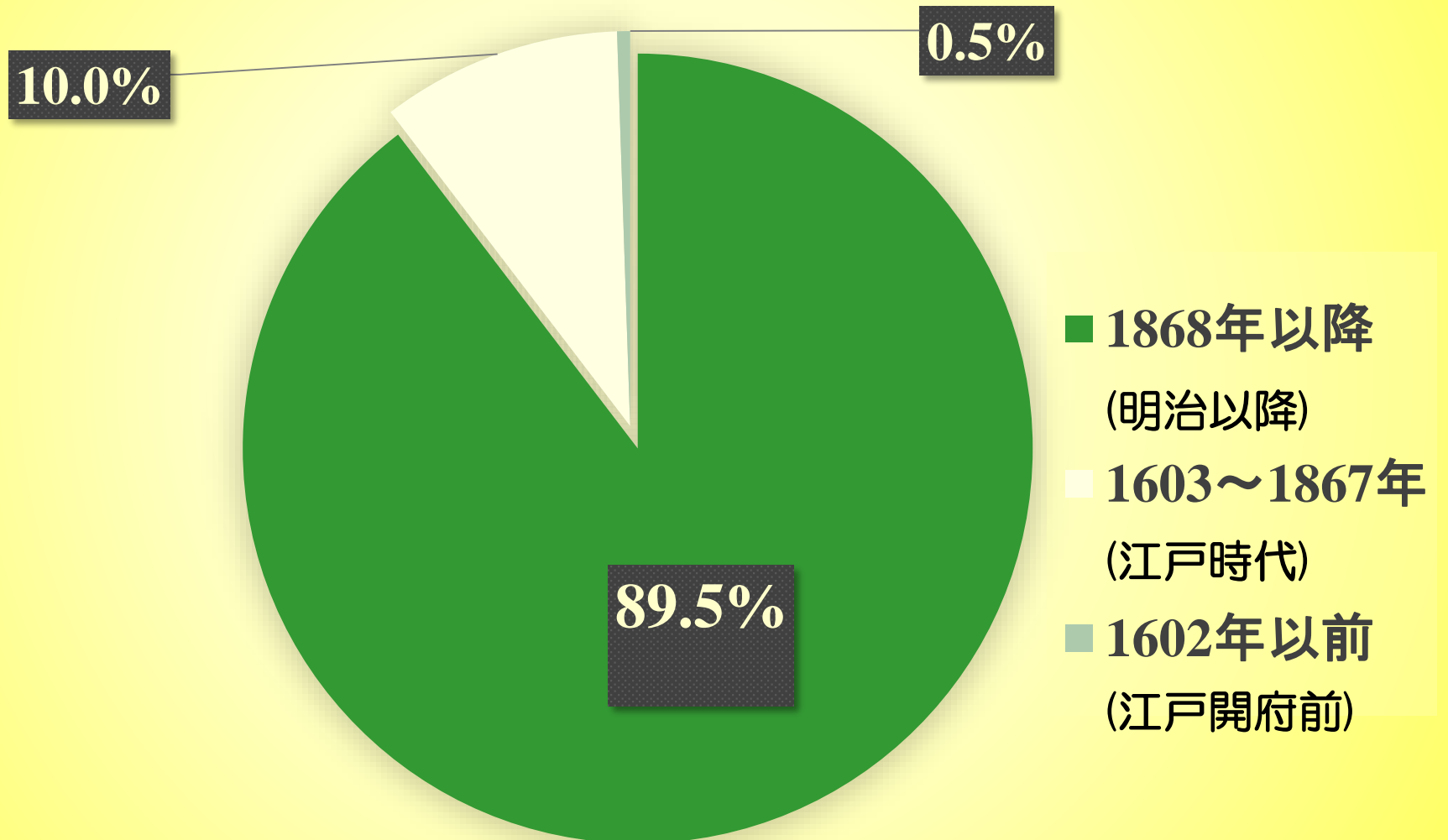
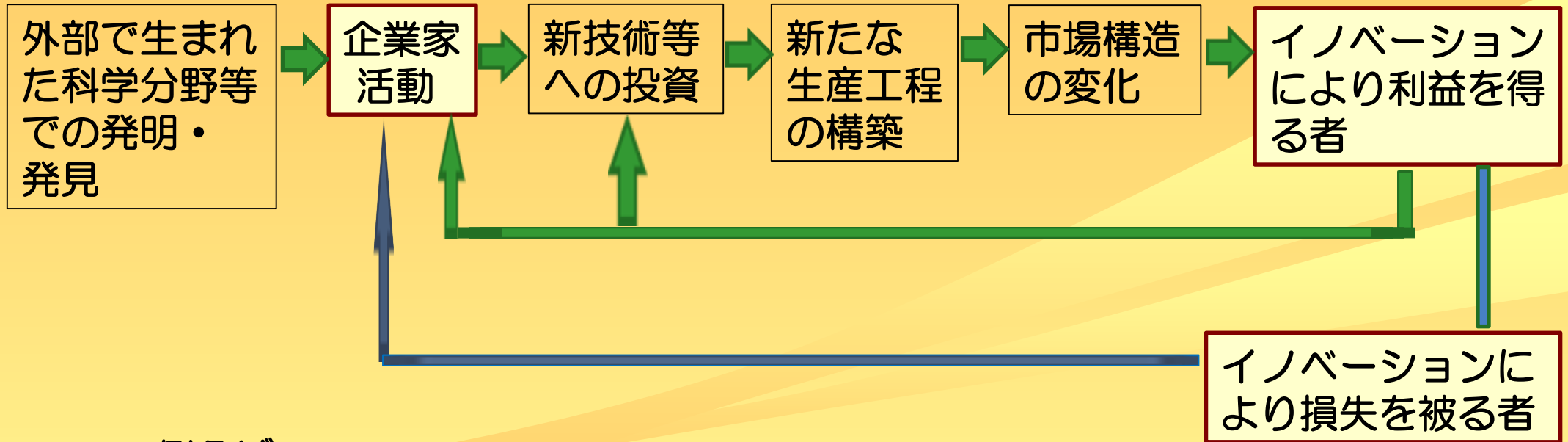


図2 長寿企業の創業時期

帝国データバンク「COSMOS」(2013)参照

企業家行動と研究

ヨーゼフ・シュンペーターはイノベーション(新結合)を行なうものを企業家と呼んだ。



例えば
鏡の製造技術(銀鏡反応/1835)の進化
顕微鏡の発明(1590)と進化~医学等の進歩
等 数多くの事例がある

図4 シュンペーター・マーク1：イノベーションモデルを参考として筆者作成

企業家研究の展開

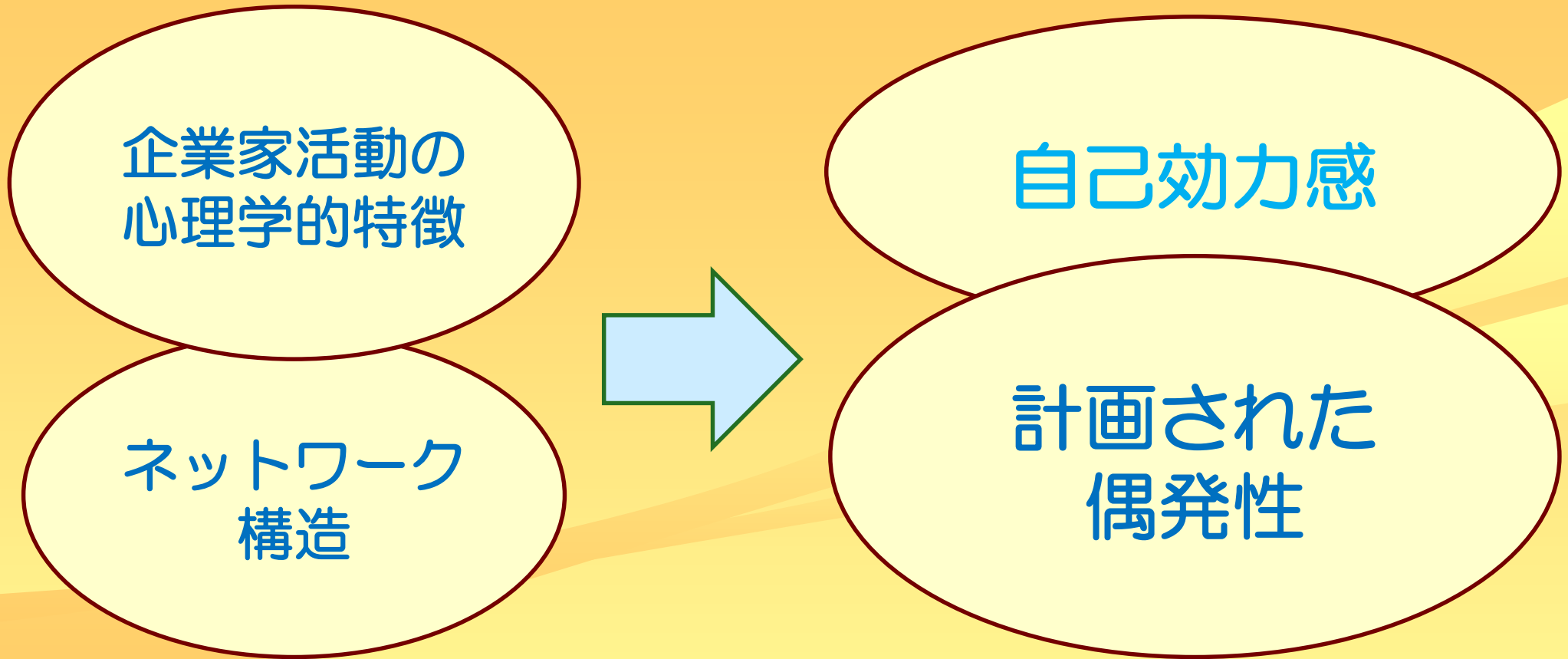


図5 企業家研究の目指す方向：筆者作成

本研究の意義と構成

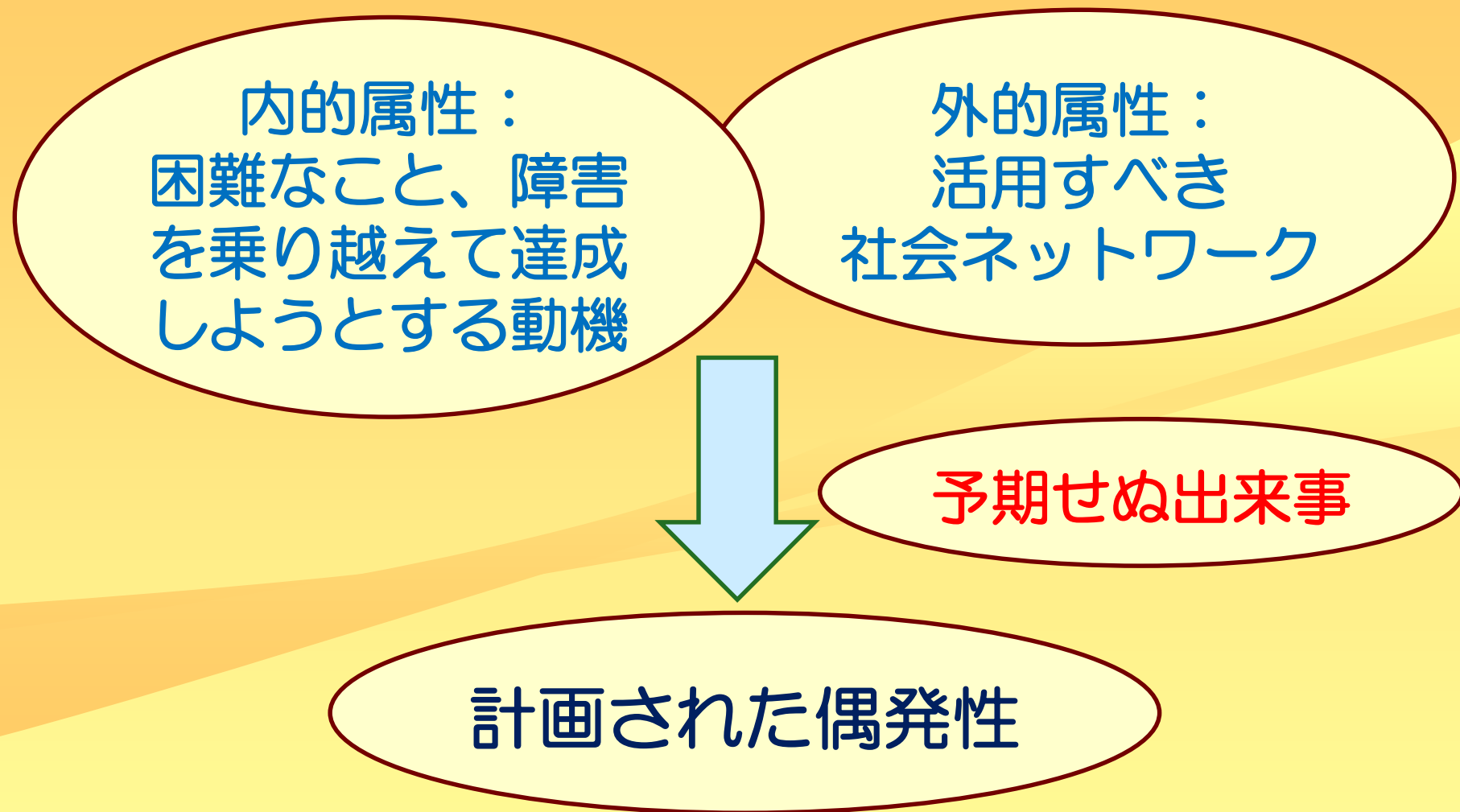


図6 創業支援・新事業支援への道：筆者作成

第2章 先行研究の検討

企業家研究の展開

マクレランド(1961)による心理学的研究から経済発展要因の概要

表1 企業家らしさの決定要因ならびに特性

決定要因と考えられるもの

達成要求、楽観主義
(その他の価値観)
企業家的地位および
(または)成功

企業家らしさの特性

I 企業家的役割行動

- a 偶然ではなしに、スキルの関数としての適度な冒険、決断力
- b 精力的・斬新な手段活動
- c 個人責任
- d 意思決定がもたらす結果を認識している結果の尺度としての金
- e 将来の可能性の予測
- f 組織化の手腕

II 自己のプレステージおよび危険性の関数としての企業家的職業への関心

『達成動機』 マクレランド(1961).訳p.293

達成要求、親和要求、権力要求
良心、楽観主義、禁欲主義および
(または)感情的中立性
達成した地位への信念
進んで自らの手で仕事を行なうこと
商業道徳 (その他の価値観)

Ⅲ 各国における企業家の地位
a 他の職業の地位との対照
b 企業家としての成功によって区別

『達成動機』マクレランド(1961).訳p.293

企業家ネットワーキングの研究

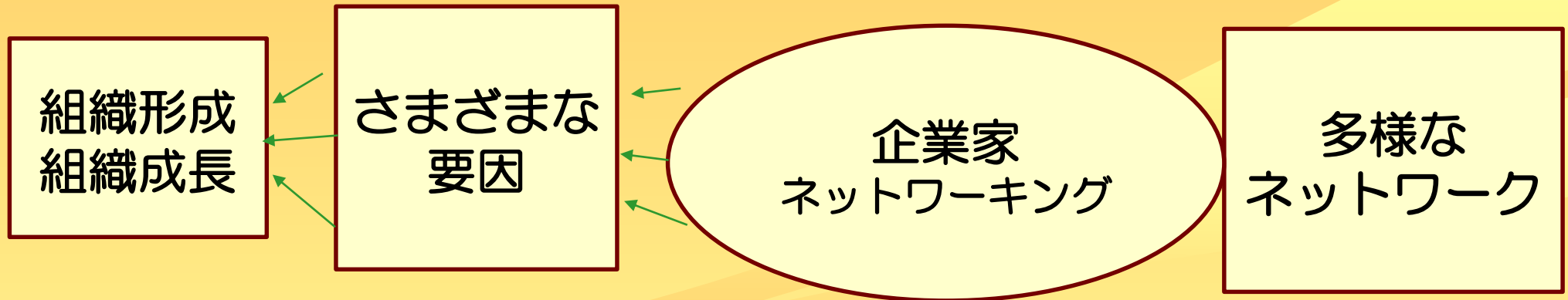


図7 金井/角田(2002)p.98を参考とし加筆

例えば、スタンフォード大学やMIT等のような研究主導型大学のような研究主導型の大学の存在と隣接するインキュベータやリサーチ・パークなどが企業家活動を刺激する。金井(1994)

計画された偶発性に向けての研究

自己効力感 self-efficacy Bandura(1995)

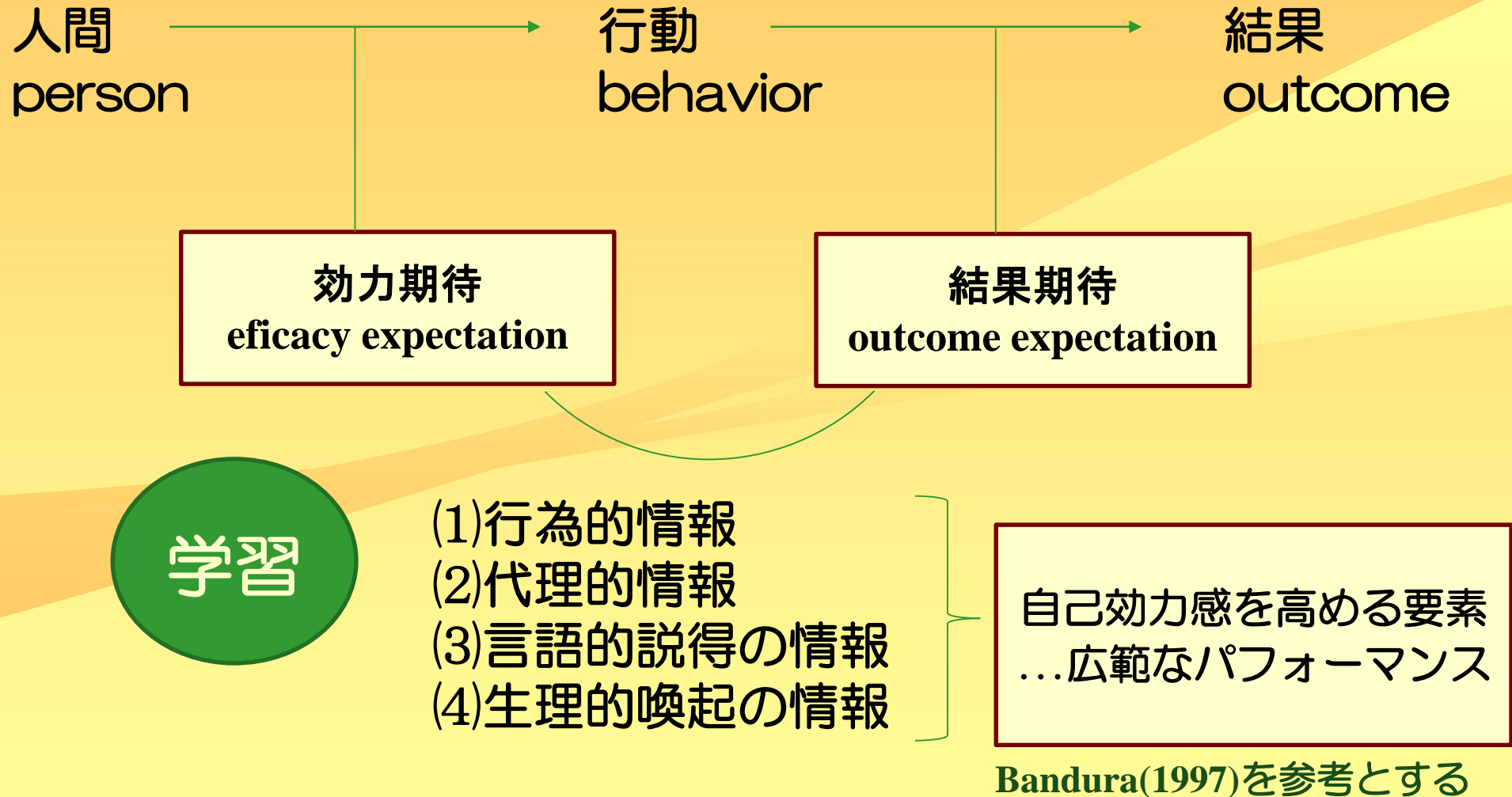


図8 自己効力感

計画された偶発性

- ◎予期せぬ出来事や出会いが、個人のキャリアの8割を左右する
- ◎予期せぬ出来事を待つのではなく、自ら作り出すように積極的に行動する
- ◎偶然を意図的・計画的ステップアップの機会へと変えて行く

…必要な行動指針…

- (1)好奇心：新しい学習の機会を模索し続ける
- (2)持続性：失敗に屈せず、努力し続ける
- (3)楽観性：新しい機会は必ず実現させる、可能になるとポジティブに考える
- (4)柔軟性：こだわりを捨て、信念、概念、態度、行動を変える
- (5)冒険心：結果が不確実でも、リスクをとって行動を起こす

Krumboltz(1999)

この理論を企業家行動にあてはめることが可能か？
何らか加味すべき要素が存在するか！

第3章 リサーチクエスチョンと分析枠組み

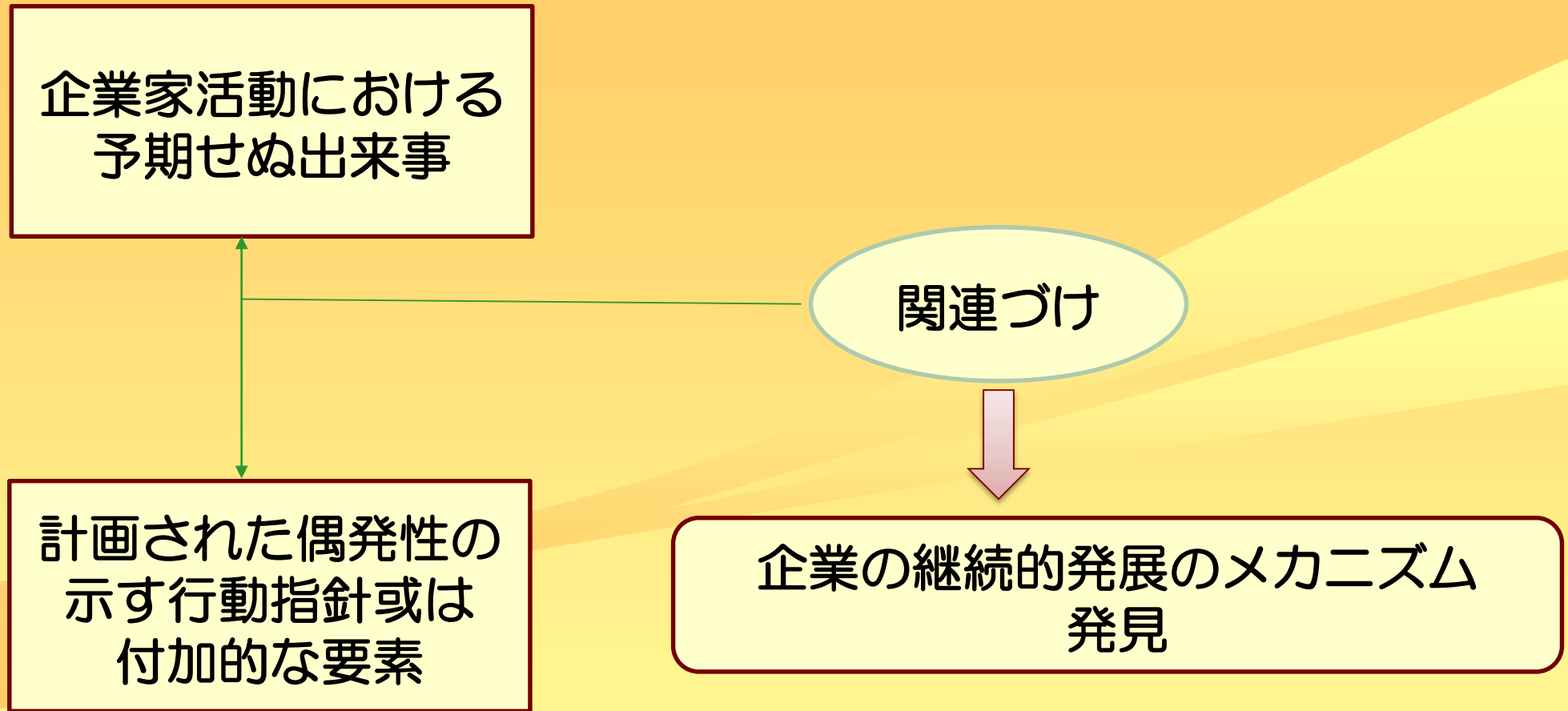


図9 企業の継続的发展のメカニズム探究

リサーチクエスチョン

1. 企業家行動が「計画された偶発性」の枠組みでどのように捉えることができるか、また捉えることにより、従来の研究では注目されなかった特定の企業家行動の意義が明らかになるのではないか。
2. 企業家行動の分析に基づいて、「計画された偶発性」に対する新たな理論的含意を導出することは出来ないか、また含意導出について、諸要因と諸状況のマッチングにパターンは見出せないだろうか。

リサーチクエスチョンに答えるために、対象事例の期間を区切って分析を行なう。

分析枠組み

…本研究はリサーチクエスチョンに答えるために仮説探索、理論生成型の取り組みとする。

プロセス分析の枠組み(初期設定)

		誕生期	成長期	成熟期	衰退または 発展期
「計画された 偶発性」が提示 する諸要因との マッチングは？ 新たな要因は？	好奇心				
	持続性				
	楽観性				
	柔軟性				
	冒険心				
	(プラス α)				

図10 企業の継続発展プロセスの分析の枠組み：筆者作成

第4章 研究の方法

本研究では質的調査の手法を採用する。
質的調査研究の場合は、現象に関する蓄積が限定的であり、
変数が十分に把握されていない時に多く用いられる

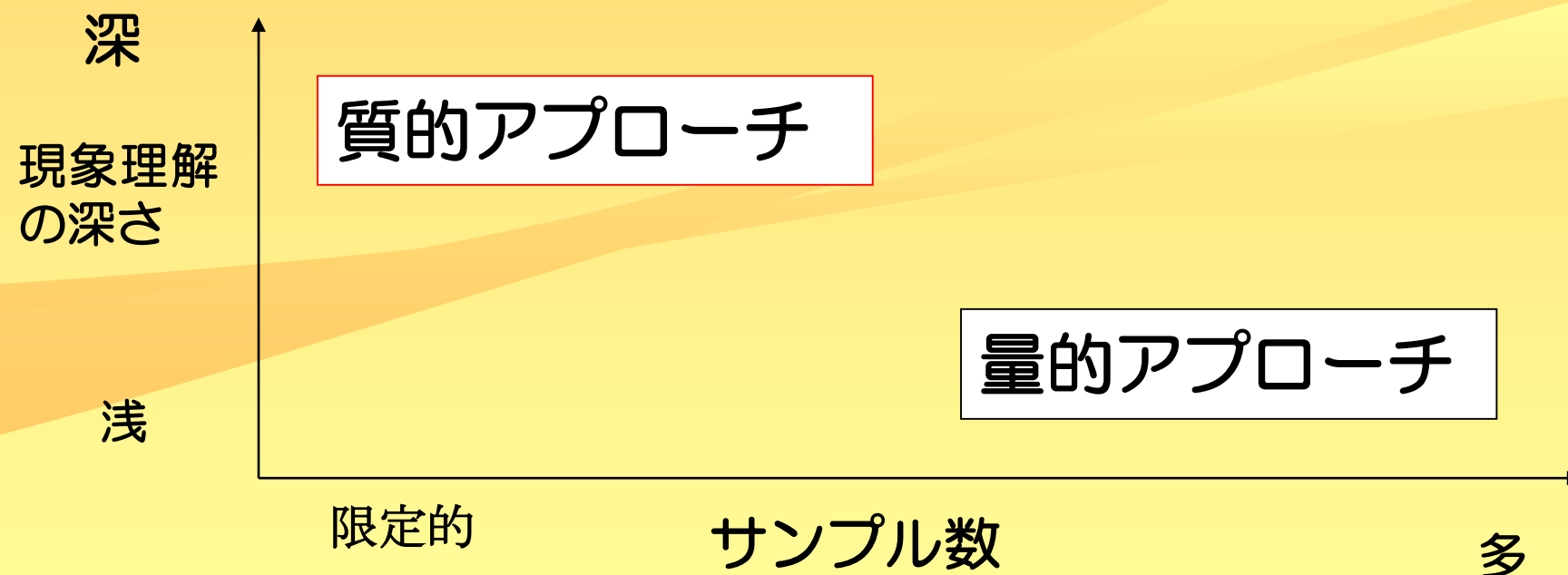


図12 質的アプローチの特徴：筆者作成

質的分析の醍醐味とは

字面や行間の奥にあるであろう意味の世界を見出して行く
作業であって、さまざまな解釈の検討を経て徐々に見えてくる
ものである

そこに、日常的に経験していることの中に新たな知見(GTAでの
理論、説明モデル)を自分が見出し生成して行く

自分の思考を緻密にし、言語化する力を自然に鍛えて行く

2016.8.20 第4回M-GTA合同研究会(大阪府立大学にて開催)基調講演(木下康仁)より

データの収集

本研究では対象とする企業家及び背景に係る文献調査、取材ベースでまとめたデータ整理により収集を行なう。

文献には、森平(1940)のように企業史としてまとめられたもの、相澤(1941)のように経済史を扱う学術誌に寄稿されたもの、中沢(1956)のように企業家から取材し、まとめられたもの等を含む。異なる種類の資料を用いることにより、同じ人物、業界を別の角度から捉えることが出来る。また、双方の媒体により片方の欠落を補うことが出来ると考えられる。

比較的新しいものに関しては、一部前述のものも含む他、筆者が企業家及び関係企業の役員、更には関連する業界における国内外の企業の責任者よりヒアリングしたものとする。

分析方法：グラウンデッド・セオリー・アプローチの概要

主として定性的データに対する、質的調査手法の一つである。

Glaser & Strauss(1967)

データに密着(grounded on data)して機能的に理論展開する。看護・医療などの臨床医学系の分野では一定の普及を見せている質的調査の分析方法であるが、経営学の分野では見出すことが難しいのが現実である。

一方で本研究のテーマである“企業家行動における計画的な偶発性とその帰結に関する探索的研究”に対して、特に計画的な偶発性の部分については、キャリア理論で提唱されているものであるが、経営学分野に及んだ十分な理論研究は存在しない。

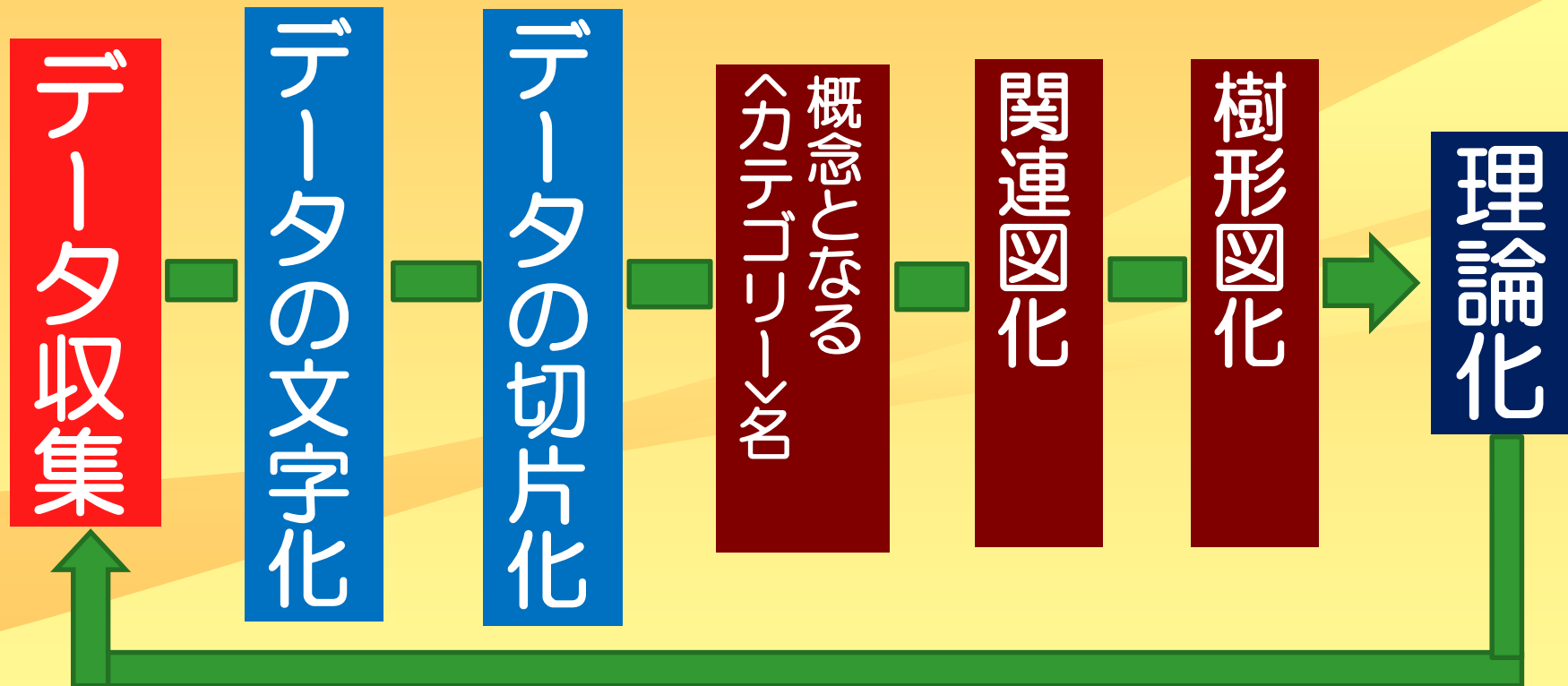
本研究で対象とする企業家及び周辺の事例は限定されているが、データ要素は深く掘り下げることが出来るものとなる。

本研究テーマに対して、Grounded Theory Approachを参考とし、分析することは比較的妥当な判断であると考えられる。

Grounded Theory Approach 分析作業の流れ

準備

カテゴリーにコード化



飽和化まで繰り返し

図13 本研究の実分析の流れの概要

データの切片化 slices of data

あるカテゴリーに関連するさまざまな種類のデータを指す。
カテゴリーと諸特性算出のために多様なデータ収集を重視する。
得られたデータの切片どうしに違いがあれば、その相違はカテゴリーやその諸特性を算出するのに有利だと考える。

…「データ対話型理論の発見」
Glaser & Strauss (1967),p.viii



データ

…企業家及び周囲の状況を身近な立場で記したものの

…企業家及び周囲の状況を客観的立場で記したものの

…企業家及び周囲の状況を対象者にヒアリングしたものの

図14 切片化したデータ群

概念の生成

初期段階で概念の生成を行なう。分析の最小単位になるものであり、データの示す現象に基づき、周辺部にある現象も含めた説明可能なまとまりを意味する。これらを抽出しグループ分けする。データに基づきつつ説明力のある、抽象的な概念が生成される。

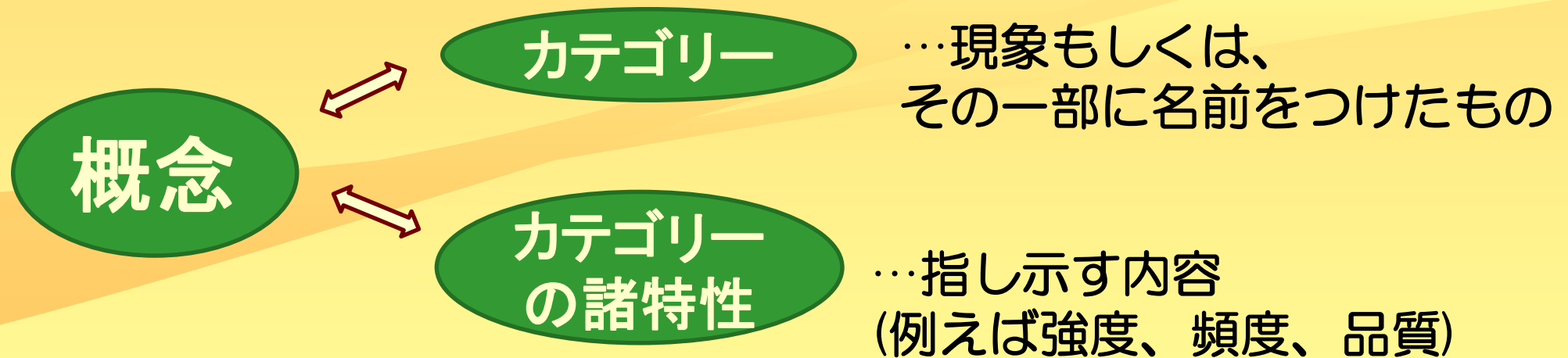


図15 概念とは
「データ対話型理論の発見」
Glaser & Strauss(1967),p.vii

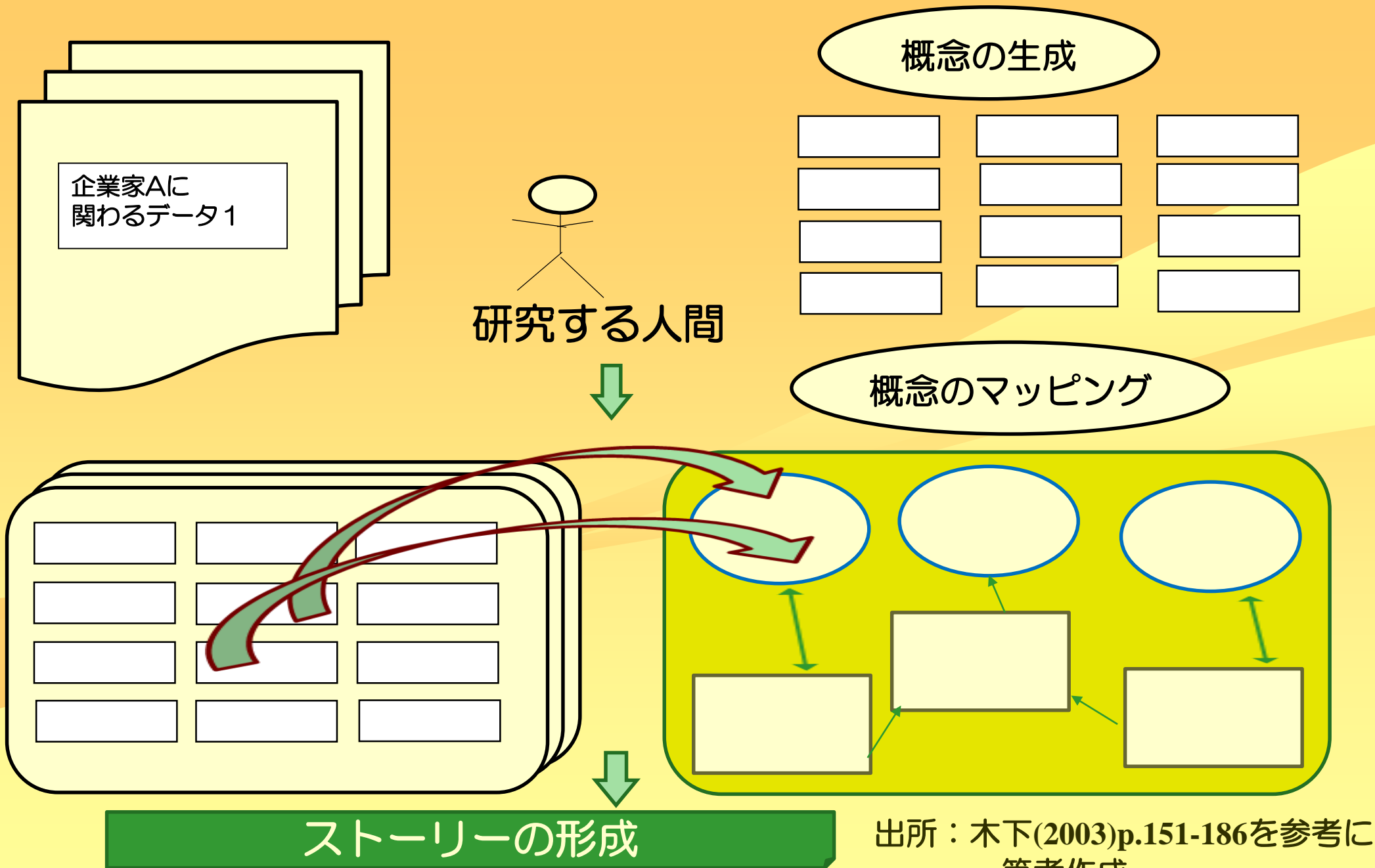


図17 グラウンデッド・セオリー・アプローチでの工程概略図

プロセス分析の枠組み

(研究対象選定に伴い時期区分を改訂)

		創業期	再構築期	発展期	新展開期
「計画された偶発性」が提示する諸要因とのマッチングは？ 新たな要因は？	好奇心				
	持続性				
	楽観性				
	柔軟性				
	冒険心				
	(プラス α)				

図18 企業の継続発展プロセスの分析の枠組み：筆者作成